鳥取の民話

32

収録・解説　酒井董美

語り手　山口忠光さん（明治40年生まれ）
昭和62年8月21日収録

北の吸物と大名の吸物

（東伯郡三朝町大谷）

どこかとぼけた面白み

あらすじ

昔、物好きな人がおって、どこにゃあどんなうまいもんがあるということを聞くと、すぐそれを捜いて回らにゃならん性分だ。ある日「どこそこの町にええ吸物があるそうな」と聞き、「ちょっと出てみてやれ」と町へ行ったところが、『北の吸物』と看板が出とる。

「こら何だらぁか」と思って「ごめんなさい」と入って「この看板にある吸物、作ってもらえるかな」って言ったら「はい、できます」。それから作って持ってきた。食べようと思って、その吸物の椀を蓋ぁ取ってみると、汁だけはあるけど何にも入っとらん。

「こりゃあ、おかしいもんだなあ」。亭主を呼んで「この吸物にゃあ何にも入っとらんが、いったいこりゃどういうわけだ」

「お客さま、まことに申しわけありませんが、うちは看板に偽りはありません」「どういうわけだ」

「外にある看板の通り、北の吸物と書いてありますが。ですから皆実（＝南）がないです。それで申しわけありませんが、中は空っぺです。北で南（皆実）がないっちゅうわけだ。こらえてください」って。

「そうか、それなら仕方がない」。それで汁だけ吸って逃げて「ああ、阿呆にあったなあ、何とか次のええもんないか」と思って回りよったら、『大名の吸物』ちゅうものがあった。

「大名の吸物なら、そう粗末なものはなかろう」と思って、またその店に入って「看板にある大名の吸物できるか」って言ったら、「できます」って言う。

それから作ってもらって、持ってきたので、やりかけて蓋ぁ取ってみたら、親指の頭ぐらいな餅が二つ入っとった。

「亭主、何だ、おまえ、大名の吸物ともあるもんが、たったこれ、団子ぐらいなもんが二つとはあんまりじゃないか」って言ったら、

「へい、お客さん、恐れ入りますけどそれでも看板に偽りはありません。大名の吸物ちゅうものは、大名は大きな大名もありゃあ小さい大名もある。いろいろありますけど、このうちの店の『大名の吸物』というのは、細くても白餅ちゅうことで、細うても白（＝城）を持った大名さん、『城持ち』だ、ちゅうことで、これでこらえてください」

「そうか、そりゃあしかたがない」

そういうことで歩いて回ったけど「今度ぁもうどっこも行かん、ばかな目にあったけえ」て、ほっでもどってきたって。昔こっぽり。

イラスト・福本隆男

解説

関敬吾『日本昔話大成』の中には見つからない話型であるが、どこかとぼけた面白みが感じられる。笑話に分類できる単独伝承の話といえるのだろう。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。